

三閣下万々歳々万々歳万々歳万々歳

鳴り止まなかった。静まるのを待って、伊

東元帥がやおら立ち上がり、「歓迎の辞としてこれに勝るものはない。」と厚く札を述べると、再び大拍手が起こった。

そして、感と同じうする者として、元帥は五無齋先生の原稿を記念に受け取った。

鈴木小右衛門長野市長が三將軍の席に酌に回ると、東郷海軍大將が、「今の人誰か。」と訊いた。鈴木市長は、「五無齋・保科百助。」と答えた。すると、海軍大將が小さな声で、「信州には怖い人がおられますね……。」と言った。

当時の各新聞が、東郷海軍大將は、総髪はげの垂れ髪たがみで眼光炯々たる五無齋先生の容貌ようぼうと居すまいを、江戸後期の勤皇家きんけいけで、義侠心ぎぎやくしんに富んだ壮烈そうれつな志士しし、高山彦九郎たかみやまひさひこ（1747〜1793）に比した、と報じた。

城山館における五無齋先生の押しかけ朗詠は、ややもすれば、戦争や軍国化を礼讃する行為と誤解されそうですが、それは明らかに杞憂きゆうです。先生の活動の軸足は常に教育の場にあつて、「教育一天張り」を押し通し、戦争は子どもから教育を奪うばってしまふ、と考えていたからです。



若い授業生と東郷平八郎海軍大將から発せられた「怖い」という言葉は、むしろ恐ろしいとか乱暴とかの意ではなく、多くの方の指摘しやうさくの通り、五無齋先生の次のような資質や才能、生き方に対する畏敬けい（偉大な人を畏れ、敬うこと）の念を表しているのでしょう。

○教育及び時代の本質や課題を的確に見抜く洞察力、先見性、見識  
○人の心を惹きつけ、人々を善導する言語表現力

○大事業を辛抱強くやり遂げる実践力、リーダーシップ、企画力  
○旺盛なユーモア精神・弱者に対する寛大さと優しさ・強烈な反骨心と正義感・飽くなき向学心・反差別を貫くモラル  
○生涯を「神聖と信じた教育」に捧げた教育者としての無垢なる教育的情熱

このようなことに思いを巡らしていた折しも、本シリーズを毎号熟読され、正鶴せいさくを射た鋭い読後評を寄せて下さる方から、「五無齋先生を語るならば、ぜひこの本をお読み下さい。」と、「小澤征爾さんと、音楽について話をする」（小澤征爾・村上春樹著 新潮社発行）という本を貸していただきました。

早速、一読しましたが、楽譜もろくに読めない身には、「このホルン奏者は、ブラームスにとつて悪いことをしている。同じテーマのこのフルートはブラームスの指定した通り……。」といった途方もなく専門的で、奥深い話は、とても理解できませんでした。

しかし、村上春樹が語っている、次の三点のような両者の凄さについては、さすがに感服しました。これらの凄さは五無齋先生に通ずる「怖さ」で、このお二人もまた「怖い人」と思えたのです。

①仕事をすることにどこまでも純粋な喜びを感じ、自分の仕事に没頭しているときが何より幸福で、仕事に熱中できているという事実が、何にも増して深い満足を与えてくれる。  
②今でも若い頃と同じハングリーな心を変わず持ち続けており、自分が今やっていることに納得し、自負も持っているが、決して満足せず、もっと追

求したいという欲深さがある。  
③頑固で、辛抱強く、タフで、自分がやろうと思ったことは何時間でも集中して、誰が何と言おうと、自分が思い描くようにやる。

今日の日本は、首相自ら、「総理大臣である私が言うのですから、間違いはありません。信じて下さいよ、私は総理大臣ですよ。」と、日本国のトップリーダーとしての威信をアピールするほど、その方の人格からにじみ出る威厳に対する畏敬の念が稀薄なご時世です。

このような時代こそ、子どもたちの健全やかな成長のために、五無齋先生の如く、物事の本質を的確に洞察し、無垢な心で、「是は是、非は非。」とする怖い大人の存在が求められているでしょう。

6月、怖い人、五無齋先生を偲ぶ……。

《参考図書》

- 「五無齋保科百助全集 佐久教育会
- 「五無齋保科百助評伝 佐久教育会
- 「保科五無齋石の狩人」井出孫六
- 「野人教育家・保科百助の生涯 五無齋と信州教育」平沢信康
- 「教育のひと 保科五無齋」卯月雪花菜
- 「詩伝・保科五無齋」三石勝五郎
- 「近代佐久を開いた人たち」中村勝実